

令和元年度第4回 神奈川県ボランティア活動推進基金審査会

令和元年11月20日（水）12：30～20：15

■ 開会

（基金事業課長から本日の予定を説明）

- 全員出席、委員9名での開催。
- 会議の流れを説明
 - ・ 14時から、令和2年度協働事業負担金（継続）のプレゼン審査
 - ・ 17時05分から、プレゼン審査に対する選考（結果発表は後日）
 - ・ 19時35分から、協働事業負担金の事業変更について審議
 - ・ 19時50分閉会予定

（審査会長から開会の宣言）

- 令和元年度第4回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会を開会する。
- 率直な意見交換を通じて公平な審査をする必要があり、神奈川県情報公開条例第25条第1項第1号に該当することから非公開とする。
ただし、プレゼンテーション審査は公開とする。

■ 審議事項1 令和2年度協働事業負担金（継続事業）の協議対象事業選考

（基金事業課長から以下について説明）

- 協働事業負担金の応募状況（資料1）
- 来年度の協働事業負担金に係る予算（資料2）
- 審査委員と利害関係のある団体からの提案なし

（事務局から事前調査結果等について説明（資料3・4））

（委員による審議）

- 協働事業負担金への提案事業に係るプレゼンテーション審査における確認事項等について検討した。

（プレゼンテーション審査の実施）

- 協働事業負担金への提案事業に対するプレゼンテーション審査を次のとおり行った。

【外国につながる子ども・若者と家族の包括的支援】

特定非営利活動法人ABCジャパン（以下「ABCジャパン」という。）によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

（高橋委員）

事業3について、今作っているガイドブックとの具体的な違いを教えてください。

（ABCジャパン）

これまで作成してきたのは小中学校の入学のガイドブックで、来年度は仕事に就くためのガイドブックを作成したいと考えている。

（高橋委員）

取り組んでいる事業は、とても重要なものだと認識している。

これまでも審査会として意見を述べさせていただいているが、今後の自立化や継続性について、電気工事士試験の対策講座や語学教室の実施状況等はどうか。

（ABCジャパン）

電気工事士試験の対策講座はすでに開講しており、今後ウェブで展開していくことを考えている。日本語教室も同様に、ウェブで展開することによりエリアを問わず参加していただけるよう考えている。これらの講座、教室はいずれもニーズがあるため、ウェブで開講することでさらなる受講料収入を見込むことができる。これが、収益事業の柱になっていくと考えている。

（高橋委員）

ウェブ展開の進捗状況と今後の展望を教えてください。

（ABCジャパン）

来年度から実施するために、現在準備を進めている。

（高橋委員）

現時点ではまだ実施していないということで承知した。

これまで審査会から、教育委員会との連携や、自立に向けた取組について意見を述べてきたが、この意見への対応状況や、今回の提案における位置づけについて説明してほしい。

（ABCジャパン）

藤沢市でガイダンスを行った。活動の場を、鶴見区以外にも広げていきたいと考え

ている。

(高橋委員)

藤沢市で意見交換までは行っているが、まだ実施には至っていないということか。

(A B C ジャパン)

そのとおりである。藤沢市での教室は来年度から始める予定で、それに向けて準備を進めている。

(高橋委員)

以前の審査会でも同じような提案をしている。改めて確認するが、令和2年度から実施するために、現在準備を進めているということによいか。

(A B C ジャパン)

そのとおりである。ガイダンスは行ったが、フリースクール自体は来期から始める予定である。

(渡邊委員)

以前もクラウドファンディングで資金を集めていたが、今実施しているクラウドファンディングはそのときと何が違うのかという点と、集まり具合を教えてほしい。

(A B C ジャパン)

前は、家賃の支払いに充てるための一時的な収入を確保するために実施した。今回実施しているのは継続型で、毎月、一口いくらという形で継続的に入ってくる。今はまだ十数名だけだが、それを広げていきたいと考えている。

(渡邊委員)

事業の拡大等は考えているのか。

(A B C ジャパン)

先ほど説明したウェブ展開に加え、外務省やJ I C A等での派遣前研修を実施しているほか、今後海外研修生の受け入れ機関となるための準備を進めている。これらによって、経済的に安定すると考えている。

(渡邊委員)

具体的な契約件数等の数字は把握しているか。

(ABCジャパン)

外務省等の派遣前研修については年数回入っており、今後も続いていくと思う。研修生の受け入れについては、1件交渉中で、契約締結に至る予定である。

(渡邊委員)

電気工事士試験以外に、何か資格試験の対策講座を開講する予定はないのか。

(ABCジャパン)

今のところ電気工事士試験のニーズが高いので、そこに集中して実施している。

(渡邊委員)

現時点では、他の試験の対策講座を開講する予定はないということによいか。

(ABCジャパン)

当然、ニーズがあれば今後はそれに対応していきたいとは考えている。

電気工事士試験には第一種と第二種があり、今は第二種試験の対策講座のみ開講しているが、第一種試験の対策講座はないのかという問合せをいただくことがあるため、まずは第一種試験の対策講座も新たに開講する等、ニーズの高い部分から拡大していきたいと考えている。

(高橋委員)

事業1の中で計上されている有償ボランティアの経費が、令和元年度の金額よりもかなり大きい。新たに事業を展開するために計上しているのだと思うが、この趣旨について教えてほしい。

(ABCジャパン)

令和2年度は、藤沢市にも展開していきたいと考えている。予算書でいうと、有償ボランティアの②が藤沢市での展開に係る部分だが、週1回実施するため2名分の金額計上している。

なお、講師謝金についても、場所が広がって人数も増えることから、きめ細かく対応するために令和元年度よりも多めに計上している。

(高橋委員)

対象者はどれくらいか。

(ABCジャパン)

鶴見は20名程度、藤沢は最大でも10名程度を想定している。

【横浜こどもホスピス設立運営事業】

特定非営利活動法人横浜こどもホスピスプロジェクト（以下「横浜こどもホスピスプロジェクト」という。）によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

（尹委員）

事業自体は先進的であり、開設のための用地も決まったことから、円滑な開設に向けて頑張っていたいただきたい。

開設した後の安定的運営に関して、心配な点がある。資金的に担保されている部分などについて説明してほしい。

（横浜こどもホスピスプロジェクト）

寄附金総額3億円の一部、約1億2千万円を運営に回し、できるだけ目減りさせないようにしたい。イベントのほか、今年は、WAM助成（社会福祉振興助成事業）の予算を使って小児緩和ケアの人材育成プログラムを実施した。福岡、仙台、松山、札幌で実施したが、福岡では定員100名があつという間に埋まった。仙台でも、県内のみならず岩手県、栃木県、新潟県や福島県などから60名が集まり、医療関係者や福祉関係者の関心の高さを実感した。

ホスピスを開設する場所の周辺には、医学部、看護学部など3つの大学があるため、そこに通う学生にも参加してもらったり、研修の場としたりして社会にアピールしながら、地域から支えられる施設として運営していきたい。

また、できれば地域の特産品にこどもホスピスのシールを貼ってもらい、売り上げの何%が当団体の収益として入る等、地域に関連した取組をしたいと思っている。

（尹委員）

地方での人材育成プログラムについて、それにより収益が得られる形で実施するのか。

（横浜こどもホスピスプロジェクト）

そのとおりである。昨年横浜で実施した際は、1人2万円の参加費を徴収した。横浜や都内であれば、そのくらいの金額でも参加者が集まる。

地方は色々な状況があるので、必ずしも横浜や都内と同水準の参加費を徴収することはできないと思うが、1日あたり6名の講師に、1人あたり3,000円の謝金を払う形で100人くらいは参加者が集まる。そのため、一定の収益を見込むことができる。

（尹委員）

事業の安定性については問題ないという認識でよいか。

(横浜こどもホスピスプロジェクト)

プログラムの実施にあたっては、国際小児緩和ケアネットワークというところから指導を受けている。また、eラーニング等を通じて、こうしたプログラムを日本語で学ぶ場を設けているところがないので、その実施に向けて継続して話し合っている。

(尹委員)

地域の特産品にシールを貼って、売り上げの一部が貴団体に入るような取組をしたという話があったが、これは具体性がある話なのか。

(横浜こどもホスピスプロジェクト)

金沢区には工業団地があり、100社以上の企業が存在する。また、地域で地域貢献会議というものがある。まだ具体化には至っていないが、12月にその会議に参加し、提案をしていきたい。

(尹委員)

人材育成について、参加者に参加費を負担していただき、この事業の収入としていく形は検討できないか。

(横浜こどもホスピスプロジェクト)

実際に、今年度もWAMの事業として参加費を負担していただく形で実施したので、来年度から基金事業としてもそうした形で実施できるよう検討したい。

(尹委員)

コンサートについて、周知がうまくいかず、人数が集まらなかったとあるが、どのように対策するのか。また、コンサートは、単に音楽を聴いてよかった、となるだけでは足りない。来場者や企業から寄附金や協賛金を得る等、事業が安定的に運用できるような仕組みづくりにつなげるのがよいと思うが、そのあたりはどう考えているか。

(横浜こどもホスピスプロジェクト)

これまで、開設場所が未定の段階で周知してきた中でも、25～30社の企業が協賛してくれた。今回、土地が決まったので、これをもっと周知していけば、さらに集まるものと思う。現在、都内の外資系の企業からも問合せがきている。

また、協賛企業には同時に会員にもなっていていただくため、会費をいただく形で継続的に支援していただける。

(長坂会長)

具体的な完成時期は。

(横浜こどもホスピスプロジェクト)

建物自体は2021年3月に完成するので、4月末か5月には開設できると思う。

(長坂会長)

大阪のTSURUMIこどもホスピスで研修をした人たちが中心となって運営をしていくということだが、新しい施設には、どのような専門性を持った人が入ってくるのか。

(横浜こどもホスピスプロジェクト)

TSURUMIこどもホスピスは、3～4年間の試行錯誤の中で、独自の形を作ってきた。当団体は、イギリス、ドイツ、オランダの施設との繋がりができた。開設前に、イギリスのマンチェスターの緩和ケアチームの代表の方をお呼びして、イギリスでのケアの仕方を研修していただく。常勤の看護師2名、保育士3名のほか、ボランティアや事務スタッフで運営する予定。

(長坂会長)

TSURUMIこどもホスピスで学ぶというのは重要であるが、イギリスの方の研修等を踏まえ、TSURUMIこどもホスピスを超えた施設をつくってほしい。

提案書には記載されていないが、職員が1～2か月海外で研修するというのもよいと思う。

イギリスから来る講師はどのくらいの期間滞在するのか。

(横浜こどもホスピスプロジェクト)

来月イギリスに行って交渉する予定だが、できれば1か月か1か月半くらい来てほしいと考えている。

(長坂会長)

チームの皆さんが現場でやり方を学び、運営方法にも新しい創造性を取り込み、そして深めていってほしい。

【フリースクール等学校外の学びの場の必要性の周知を目的とした県域ネットワーク構築事業】

特定非営利活動法人鎌倉あそび基地（以下「鎌倉あそび基地」という。）によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

(為崎委員)

当初は2年目からエンカレ事業を実施する予定だったが、既存事業にエンカレ事業

を取り込むことになった。それによる影響はないのか。

(鎌倉あそび基地)

当初は、団体の良さ等を大々的にアピールする必要があると考えており、エンカレ事業を1つの独立した事業として実施する計画だったが、予想以上に反響があり、また団体や事業の知名度も上がったと感じている。そこで、エンカレ事業の実施にかかると想定していた費用をウェブサイトの構築に充てることとし、全県向けに情報を発信する体制を整えることとした。

(為崎委員)

ひきこもりの方に対する情報提供という意味では、類似のウェブサイトはすでにあるように思う。そうしたものと、今回作ろうとしているものとの違いは何か。

(鎌倉あそび基地)

民間団体が運営するウェブサイトは他にもあると思うが、県と一緒につくるところが大きい。信用性も高くなり、他の団体ともつながりやすい。

また、こちらから一方的に情報を発信するだけのウェブサイトではなく、利用者の方から、こういった情報が欲しいといった声があれば、それにも応えられるようなウェブサイトにしたいと考えている。

(為崎委員)

双方向型のウェブサイトは運営や維持が大変だと思うが、そのあたりは問題ないのか。団体スタッフの体制も含め教えてほしい。

(鎌倉あそび基地)

デザインはしっかりしたものになりたいと考えている。団体には、もともとウェブサイトの運営に携わっていたスタッフがいるので、その者を中心に運営することになる。

(為崎委員)

事業の中で、フリースクール等連携協議会とどのように関わり、相乗効果を上げていこうと考えているか。

(鎌倉あそび基地)

当団体はまだ3年目の団体だが、協議会には、もっと長期間フリースクール等を運営している方が大勢いらっしゃるのので、様々なご意見や情報をいただけたらと考えている。また、チェック機能的なものも果たしていただけたらと期待している。

(為崎委員)

逆にフリースクール等連携協議会に提供するものはあるのか。

(鎌倉あそび基地)

まだ具体的な形となっているわけではないが、協議会の参加団体の方から情報を提供していただき、その記事を新たに作成するウェブサイトに掲載する等、その団体のことをもっと知っていただく機会をつくることができると考えている。

(為崎委員)

今後の収益源として、学童と新たな事業が挙げられていたが、このうち学童は委託事業か。また、新たな事業を実施するとなると、団体のスタッフにとって負担になるのではないか。

(鎌倉あそび基地)

学童は委託ではない。

団体の他のスタッフに負担がかかるということにはならない。ある団体とのコラボによるプログラミング授業で収益を得るのはどうかというアイデアもある。

これに限らず、他にも様々な可能性を探りながら収益事業を実施したいと思っている。

(尹委員)

新たな事業により収入確保に取り組むとあるが、具体的に教えてほしい。

(鎌倉あそび基地)

6団体くらいと鎌倉市とで、一般の子どもだけでなく、不登校の子どもや障がいを持った子どもが集えるようなアートの拠点として空き家を活用していこうという動きがある。まだ検討に入った段階なので詳しい話はできないが、子どもたち向けのワークショップを実施するイメージである。

(尹委員)

そこで収益が発生するということか。

(鎌倉あそび基地)

そのとおりである。

(尹委員)

協働部署から提出された協議結果報告書の中に、「学校生活の再開に向けて」という一文もあった。協働部署はこの事業についてどう考えているか。

(子ども教育支援課)

フリースクール等連携協議会は、社会的自立と学校生活の再開を目標に掲げており、学校生活の再開も含めて社会的自立と考えている。フリースクール、フリースペースと学校と連携していく協議会なので、その理念を共有して進めている。

(鎌倉あそび基地)

フリースクール等に来た日数も学校への出席日数としてとらえるなどの方向で、10月25日付けで文部科学省も通知を発出し、必ずしも子どもを学校に戻すことが全てではない、という考えで動き始めている。神奈川県も同じような認識だと捉えている。

(尹委員)

学校に戻すのが全てではない、という考え方は共有できる部分だと思うので、お互いに認識を共有して頑張ってもらいたい。

【隙間時間活用による高齢者職場還流プログラム推進事業】

特定非営利活動法人YUVEC（以下「YUVEC」という。）によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

(渡邊委員)

現在の会員数と、3月までの見込み数を教えてほしい。

(YUVEC)

現在8社。うち4社は、今年度の上半期に会員になってもらった企業。3月までに、もう6社獲得したいと考えている。やり方としては、今のやり方で間違っていない。

(渡邊委員)

資料には15社と記載されているが、その数字はどこに出てくるのか。

(YUVEC)

もともと10社からスタートし、年度末の時点で20社にまで増やすという計画で、期中平均15社と想定していた。キャンセル等もあり、そもそもスタートの数字が変更になってしまった。

(渡邊委員)

課題はないと書かれているが、現在もその認識は変わらないか。

(YUVEC)

問題意識はあるが、今のやり方を変える必要性は感じていない。

(渡邊委員)

今の収益モデルを改めて説明してほしい。

(YUVEC)

研究会に参加していただくと、年間6万円支払っていただくことになる。計画では、こうした企業を20社~30社とする想定だった。また、研究会への参加の有無にかかわらず、相談があればコンサルティングも実施する。事業計画上の単価は、2時間1単位、交通費を含めて2万1千円。

また、当団体は無料職業紹介事業の許可申請を出しているが、有料職業紹介事業を実施している企業と連携する中で、感謝の気持ちという形で寄附をお願いしており、こうしたものも収入源の一つとして考えている。

(渡邊委員)

収入のベースはあくまでも会費とコンサル料金であり、寄附金はあったらいいなというイメージで考えているということでしょうか。

(YUVEC)

そのとおりである。

(渡邊委員)

中小企業へのアプローチはどのように行っているのか。

(YUVEC)

神奈川県中小企業家同友会や神奈川産業振興センター、横浜商工会議所などを通じて知り合いになった方々にお声がけしている。また、神奈川県プロ人材活用センター等を通じたアプローチも行っている。

(渡邊委員)

これまでアプローチした企業の具体的な数はわかるか。

(YUVEC)

アプローチした企業は数十社。ただ、実際に会員となっていたのはそのうちの一部である。

(渡邊委員)

企業にアプローチするためのツールは作成しているのか。

(YUVEC)

パンフレットやホームページ等がある。ただ、こうしたものは、実はインパクトがあまり大きくなく、知り合いを通してつながるほうが、効果大きい。

(渡邊委員)

研究会を実施するのは、会費をいただく前と後のどちらか。

(YUVEC)

二種類ある。クローズドな形で、隔月で実施しているものと、オープンな形で実施しているシンポジウムがある。

(渡邊委員)

知り合いになった人にアプローチするだけでは、範囲が限定されてしまうのではないか。もっと様々な企業にアプローチすることは考えていないのか。

(YUVEC)

それはできればやりたいと考えている。たとえば、神奈川産業振興センターのメールマガジンで広報をしていただいたり、中小企業家同友会の広報媒体を使わせていただいたりする等、積極的に動いている。

(田中委員)

協働事業として実施したことによる成果の一つとして、神奈川県プロ人材活用センターとの関係が深まったということが挙げられると思う。ただ、同センターの事業は、貴団体の事業と重なる部分もあると思う。両者のすみ分けをどのように考えているか。

(YUVEC)

有料か無料か、というところが一番大きい。プロ人材活用センターは、40社以上の有料職業紹介事業者と関係があり、様々な事業者を紹介できる。先方が無料での職業紹介を望む場合は、そこで当団体を推してもらおうという流れが多い。

【「食」と「地域」をつなぎ神奈川から貧困をなくすためのK-Model構築事業】

特定非営利活動法人セカンドリーグ神奈川（以下「セカンドリーグ神奈川」という。）によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

(田中委員)

K-Model が地域で具体化されたことは大変な前進だと思う。
ビーバーリンクはどのような経緯で生まれたのか。

(セカンドリーグ神奈川)

当団体は中間支援組織。各地域の団体から話を聞いていくうちに、食をどのように提供していくか、という課題を持つ団体が多く、当団体のやるべきことがはっきりしてきたというのが大きい。当団体にはフードバンクとのつながりもあったことから、それをいかに効率的に、各支援団体の自立性を尊重したままネットワークして、重層的に支援できるようになるかを話し合った結果、このような形になった。

(田中委員)

それぞれの地域で小さなネットワーク会議を構築してきたということか。

(セカンドリーグ神奈川)

そのとおりである。これまでの活動により様々なネットワークができてきたことから、それぞれの地域でやっている。ビーバーリンクの基本的な定義は決まっているが、各地域により支援の具体的な方法や想いは異なるため、そこはネットワーク会議の中で丁寧に話をして、現段階で5つ、進めている。

(田中委員)

ビーバーリンクによって企業の参加が増えたとの説明があったが、その理由を分析しているか。

(セカンドリーグ神奈川)

子ども食堂の意義を知ったり、何か応援したいという企業が増えたりしているのだと思う。ただ、1か所だけでは使い切れず、食品ロスが生まれてしまう。ビーバーリンクという形でうまくネットワークを活用することでそうしたロスを防ぐことができる、ということも説明しているため、そうした部分を踏まえて企業に納得していただけているのだと思う。

(田中委員)

究極の目的である貧困の削減という点について、ビーバーリンクの設置による手ごたえは感じているか。

(セカンドリーグ神奈川)

食べ物がもらえるというだけで明日の活力になるし、別のお金の使い方ができる。我々が支援している人の中には深刻な状況にある人も多い。具体的に何ができるかというのを継続的に考えていきたい。

手ごたえとしては、協働事業として実施することでビーバーリンクが広がっていること、また共感してくださる方々と協力して、ビーバーリンクを通じて地域に還元していくことができるという点に、大きな手ごたえを感じている。

(田中委員)

提供者側の視点での手ごたえは承知した。利用者側の視点での手ごたえは何かあるか。

(セカンドリーグ神奈川)

ひとり親家庭への支援については、県のひとり親家庭総合支援情報サイトである「カナ・カモミール」に情報を掲載していただき、そこから利用者が増えている。キャパシティの問題もあるため大々的な広報は行っていないが、利用者同士のつながりも生まれ始めている。

一方で、働いている方々は、行政が発信する情報をなかなか把握できないため、各種の支援窓口等の紹介やLINEでの情報提供などを行っており、母親同士のつながりも広がっている。

当団体は、中間支援組織ならではの役割を果たしており、利用者も増えている。

(峯尾委員)

事業名の中に、「食」と「地域」をつなぐ、という表現がある。究極的には地域づくりも目標になると思うが、その見通しは。

(セカンドリーグ神奈川)

ビーバーリンクは各地域に1つずつある。今は、茅ヶ崎にある空き家を利用したビーバーリンクをモデル化したいと考えている。空き家を活用して、貧困や高齢化など、地域の様々な課題を持ち寄る場所をつくるという形が各地域でできれば、それが地域の課題解決につながると考えている。

(峯尾委員)

ここで言う貧困とは、経済的な問題のことではなく、心の貧しさなどを意味しているのか。

(セカンドリーグ神奈川)

経済的に生活困窮に陥っている方もいるが、その裏にはLGBTや引きこもり等の問題もあり、様々な課題がつながり合っている。一言で貧困と言っても、経済的な側面だけではないということがわかった。そのため、地域の課題解決として、様々なことに取り組んでいる。

(峯尾委員)

子ども食堂を卒業した子どもたちや、子育てが落ち着いたひとり親など、この事業を実施した先の課題等はあるか。

(セカンドリーグ神奈川)

地域で顔の見える、助け合える関係をつくることが究極の目標になると思う。それに向けて、これからも取り組んでいきたい。

【造血幹細胞移植総合支援プロジェクト事業】

特定非営利活動法人がんサーネットジャパン(以下「がんサーネットジャパン」という。)によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

(中島委員)

実際にSTART TO BEのサイトを拝見した。見やすいようにデザインされており、とても素晴らしいと思う。

第一の目標がドナー登録者数の増加とされている。今年度も登録者数が増加しているが、これについてどう分析されているか。

(がんサーネットジャパン)

時代が背中を押してくれた部分も大きい。日本のある有名な水泳選手が白血病に罹患したことを契機に、全国的にドナー登録者数が増加した。

(中島委員)

そうした追い風もある中、提案の中では、一般の方への周知について課題認識を持っているようである。この事業は、大きく分けると、普及啓発と家族の支援の2つに分けられると思うが、後者については、専門的なシンポジウムも開催するなど充実していると思う。一般の方への周知、一般の方を巻き込むという点について、今回の取組はどのように結びついてくるのか。

(がんサーネットジャパン)

看護学校での講演会や、子どもへの講演会等が挙げられる。特に子どもへの講演会は、子どもを通じて親への啓発にもつながる。

また、血液がんフォーラムでは、パネルディスカッションも2時間行った。非常に有意義な取組だったと思う。

(中島委員)

色々な事業をやられていて、それぞれの事業はとても素晴らしいとは思っている。

会場に来られた方にアンケートをとっていると思うが、それによって、何名の方がドナー登録をしたか、あるいは登録しようと思ったか、ということは把握しているか。

例えば、来場者へのアンケートで、よく「このイベントに来てよかったか」という設問があり、それも大事ではあるが、目標はあくまでも登録者数の増加。アンケートを通じて、登録者数の増加にどうつながっているかを把握しているか。

(キャンサーネットジャパン)

フォーラムの開催は11月9日だったので、まだ集計していない。

(中島委員)

直近のフォーラムに限った話ではない。これまでも色々な学校等で講演会を行っていて、そうしたアウトプットの話は出てきている。それが、目標や成果にどう結びついているかということ进行分析しているか。

(キャンサーネットジャパン)

それ自体は測っていない。問合せも多くいただいているが、それが登録者数の増加にどの程度結びついているかという観点では分析していない。

(中島委員)

一般の方への周知という意味では、この観点は非常に重要。どのような取組をどのような方に行った結果どのような効果が上がったか、というのを追いかけていただくのがよいと思う。

もう一点、神奈川骨髄移植を考える会とも同じ特定課題に取り組んでいる。考える会の活動は、この人たちに働きかけた結果登録者数が増えた、というのが見えやすいが、ウェブサイトを通じた普及だと、それがどの程度神奈川県民の中での登録者数増加につながったかが見えにくい。コンテンツの内容面以外で、何か考える会等の連携も含めて神奈川県民向けに特化した取組を行うことは考えているか。

(キャンサーネットジャパン)

ドナー登録会の開催数を増やすというのが当団体の役割の1つだと思う。考える会が説明員を派遣するのは、実際に登録会の開催が決まった後の話であるため、当団体は開催数を増やすことができるよう取り組んでいきたい。

(水澤委員)

がん患者を総合的に支援するプロジェクトとして体制が整っており、心強い。企業へのアプローチやインターネットの活用等、多方面から取り組んでいることは評価できる。また、これからもどんどん寄附が増えるとよいと思う。

ウェブサイトのコンテンツの更新にかかる人件費を削減するために、できる限りス

スタッフが学んで関わっていこうという提案があったが、スタッフにも負担がかかると思う。サービスグラントが実施するプロボノを活用するのはいかがか。

(がんネットジャパン)

すでにプロボノで色々とお世話になっている。

(中島委員)

ウェブサイトに関して、大きな金額が計上されている。最初にウェブサイトを構築するまではデザイン費用等も含めて大きな金額がかかり、それ以降のメンテナンス等にはそこまで大きな金額がかからない、というのがよくあるパターンだが、長期的に見たときに、今後のウェブサイトの運営やメンテナンスについてどう考えているか。

(がんネットジャパン)

今回協働事業として実施するにあたって、団体のホームページとは別のドメインで新たにウェブサイトを構築した。登録者の方から個人情報をいただくことになるので、セキュリティに万全を期したサイトをしている。そのため、メンテナンス費用がかかってくる。

なお、サイトに掲載するための寄稿を送ってくださったり、無償で執筆をしてくださったりする医師の方もいらっしゃる。こうした動きが広がっていけば、よりコンテンツが充実してくると思う。

(中島委員)

事業名にもなっている参加型プラットフォームについて、誰がどのように参加するのか教えてほしい。

(がんネットジャパン)

サイトに登録していただいた方には、月2回メールを配信する。それに対してフィードバック等をしていただくというのが1つ。また、その方が欲しい情報、例えば患者であれば治療に関する情報、家族であればサポーターに関する情報がマイページに表示されるようになっているというのも相互的な部分である。

(中島委員)

その登録者は、患者やその家族が多いということか。

(がんネットジャパン)

患者も多いが、例えば考える会の活動の対象となるような、サポーター、支援者も多い。

(中島委員)

では、サポーターや支援者ではなく、例えば単なるドナー登録者やドナー登録に関心がある方など、より一般の方に近い方の参加についてはどのように考えているか。

(がんネットジャパン)

ウェブサイトにはイベント一覧も掲載しており、そうしたところを活用していただきたいと考えている。

(中島委員)

ウェブサイトの効果に関して、主なターゲットを決めて、トライアンドエラー、検証のような形で進めていくのもよいのではないか。一般の方にアクセスしてドナー登録に結びつけていくために、具体的に試してみたいことはあるか。

(がんネットジャパン)

1年間事業を実施してきて、第一のドナーは登録者本人、第二のドナーは登録者を支える、職場の仲間や家族等、第三のドナーは当団体のような活動を支えてくださる方だと感じている。それぞれの立場の方が、どのようなきっかけがあるとドナー登録をしようという考えに至るかを検証してみたい。

(中島委員)

それぞれの立場によって、効果的なアプローチの仕方は変わってくる。そうしたことを検証したいということではよいか。

(がんネットジャパン)

そのとおりである。

【骨髄ドナー登録推進事業】

神奈川骨髄移植を考える会によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

(水澤委員)

それぞれの事業で成果が上がっていると思う。ドナー登録の講座の参加者、がん患者が説明員になるというのは素晴らしい。高校や大学を訪問して登録を呼びかけるといった活動も積極的に行っている。

この活動を継続的に進めるためには、協働事業の終了後に資金面をどうするかが問題となる。どのように資金を確保していくのか。

(神奈川骨髄移植を考える会)

例えばライオンズクラブ等に、団体が作成したチラシ等を配布する際に、献血や登録の依頼と併せて資金の援助をお願いできないか、働きかけている。

(水澤委員)

寄附を募っていくということだと思う。とすれば、NPO法人し、ゆくゆくは認定NPO法人となれば、より多くの寄附が集まるのではないか。

(神奈川骨髄移植を考える会)

色々な要素を考慮して考えていきたい。

(中島委員)

事業1、説明員を養成して説明員になっていただき、登録者を増やすというサイクルの中で、何か課題はあるか。

(神奈川骨髄移植を考える会)

ドナー登録をしていただいた後の、実際の提供に至るまでのインセンティブ、例えば市町村によるドナーへの助成制度や休業に関する制度等をもっと発信していくことが必要だと感じている。

(中島委員)

キャンサーネットジャパンと一緒に事業を進めることで効果的だと感じるがあれば教えてほしい。

(神奈川骨髄移植を考える会)

キャンサーネットジャパンは、最新の情報を多くの方に発信していくという部分に強みがある。一方で、当団体は草の根運動のような、ドナー登録の実質的な部分に強みがある。また、キャンサーネットジャパンは企業等にもアプローチして普及啓発を進めており、実際に2社で献血会・ドナー登録会を実施することができた。次年度は、これまで以上に連携を密にして活動していきたい。

それ以外にも、キャンサーネットジャパンが開催した血液がんフォーラムの会場に当団体のブースを設置させていただき、手作りの商品の販売等を行わせていただいた。

(中島委員)

登録者も高齢化していくことを考えると、若者のドナー登録者を増やすというのは重要だと思う。若者へのアプローチについての課題とその対応をどう考えているか。

(神奈川骨髄移植を考える会)

やはり当団体単独でのアプローチは難しい。学生ボランティアや、新たに始動した

骨髄バンクアンバサダーや同ユースアンバサダーとの連携が必要だと感じている。

また、大学のほうでもこうした活動への機運が高まっている。ただ、実際に大学にアプローチしたものの、献血はよいがドナー登録はハードルが高い、と言われてしまった例もある。このあたりの推進が必要だと思っている。

(中島委員)

提案事業の中では、金額的にも人手的にも説明員の養成が主な割合を占めていると思う。今まで理解があまり進んでいなかった方にもドナー登録をしてもらうために、県との協働を行っている実績が役立てられる部分はあるか。

(神奈川骨髄移植を考える会)

今度、音楽イベントを実施して通行人に声を掛けたいと思っている。また、これまで協力してきた団体等に対して、当団体のメッセージやコメントを発表させていただくといった形でアプローチしていきたいと考えている。実際に、具体的な話も進んできている。

(中島委員)

骨髄の提供というのは、ドナー登録者にとっても非常に大きな意思決定が必要となる。その意味で、正しい知識の普及啓発は重要だが、これについて考える会だからこそこできることは何か。

(神奈川骨髄移植を考える会)

例えば、高校に行って、授業の1コマをお借りしてドナー登録者、骨髄提供者等に話をさせていただく機会を設けた。また、ライオンズクラブから紹介を受けた団体にも情報を提供した。

(中島委員)

来年度が協働事業の最終年度だが、説明員の方の社会復帰という点に関しての工夫や、来年度中に取り組んでみようと考えていることはあるか。

(神奈川骨髄移植を考える会)

プロボノによる支援を受ける中で様々な提言をいただいているため、まずはそれを実施していきたい。また、社会復帰が一番大きな課題であると認識している。

(中島委員)

来年度が協働事業の最終年度だが、協働部署として、キャンサーネットジャパンと考える会の事業について何かコメントはあるか。

(がん・疾病対策課)

時代が後押ししている部分もあるとはいえ、両団体の活動によってドナー登録者数が増加したという事実がある。がんネットジャパンの洗練された広報活動、考える会の草の根的な活動、両者が合わさってドナー登録者数の増加につながっていると思う。

【アクティブエイジ応援プロジェクト】

特定非営利活動法人横浜移動サービス協議会（以下「横浜移動サービス協議会」という。）によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

(峯尾委員)

令和元年度の成果として大きく分けて4点挙げられていたが、これは、人材の発掘と、発掘した人材を地域に繋いでいくという2つの事業を一体化させて整理した成果という認識でよいか。

(横浜移動サービス協議会)

当初の計画では、発掘と実践を分けた形になっていたが、一体として事業を進めることが重要だと考えるに至り、実際に両事業のつながりを意識して事業を進めてきた。来年度は、計画上も2つの事業を一体化させ、本格的にそのような形で実施したい。

(峯尾委員)

こういった事業を進める場合、まず、連携先を見つけることが難しいと思うが、その取組の具体的な内容を教えてほしい。また、名前の挙がっていたホンダカーズとの連携が始まったきっかけがあれば教えてほしい。

(横浜移動サービス協議会)

私が現役時代に自動車関係の仕事をしていた関係で、ホンダとの付き合いがあった。また、現在、当団体では福祉車両を使用した事業を行っている。福祉車両の買い替え等を通じて、今後もホンダカーズとはギブアンドテイクの関係を続けていきたい。

(峯尾委員)

やはりきっかけを作っていくのが大変だと思う。サポーターバンクに登録した方の人脈や過去の経歴を生かすという形なのか。

(横浜移動サービス協議会)

これまでは、もともと持っていた人脈に頼っていた部分がある。そこで、まずは研修実施前に企業向けセミナーを開催して、まずはこちらを向いてもらった後、研修や

実践につなげていきたいと考えている。

(峯尾委員)

それはすでにプログラム化されているのか。

(横浜移動サービス協議会)

自動車系企業へのアプローチは概ね計画通り。ただ、それ以外の企業についてはまだ不十分なので、もう少し多面的に企業にアプローチしていきたい。どのような形で企業のアクティブエイジを取り込んでいけるか、多面的に考えていきたい。

(峯尾委員)

サポーターバンクの登録者を地域につないでいくシステムのようなものは構築されているか。

(横浜移動サービス協議会)

年代や興味のある分野はデータベース化している。このイベントにはこの方に取り組んでいただく、という仕組みを導入し始めた。

(為崎委員)

来年度は負担金最終年度となる。自立化に向けた令和3年度以降の展望として、研修会やイベントの有償化、企業との連携等が挙げられているが、これらの収益源でどの程度の資金が確保できる見込みか。

(横浜移動サービス協議会)

具体的な数字では見込んでいないが、これまで事業を進めてきた中で、収益を上げる手段は見えてきている。

(為崎委員)

事業費の中に占める人件費の比率が非常に高い。見込んでいる収入が得られなければ、場合によっては人件費を削る必要性も出てくるが、そのあたりをどう考えるか。

(横浜移動サービス協議会)

今は仕組みづくりの段階。仕組みづくりが終わり、モデル化されれば、新たな人材確保にかかるお金が減ってくる。

(為崎委員)

ということは、来年度は今よりも人件費の比率は低くなるということでよいか。

(横浜移動サービス協議会)

そのとおりである。

(為崎委員)

当初は、企業で働いている方を見守り支援等に結び付けていくという想定だったが、なかなか難しく、今度は障がいのある方を入れていく、という流れがあった。実績を見ると、無償の送迎や団地での研修等が挙げられているが、主にどういった層をどのような活動に結び付けてモデル化を図るのか。

(横浜移動サービス協議会)

障がいのある方は受益者には含めていない。セミナーや研修の対象としているのは支援者側。

これまでは、あまり有償化をしていなかった。研修やイベント、セミナー、シンポジウム等を有償化していく。それと同時に、コンサルティングやアドバイザー等も加えていきたい。

(為崎委員)

もしかすると企業よりもNPO法人等のほうがアプローチしやすいかもしれないが、協働事業終了後も、継続して企業にアプローチしていくという認識でよいか。

(横浜移動サービス協議会)

そのとおりである。

【湘南ワンハンドレッドプロジェクト】

特定非営利活動法人湘南スタイル（以下「湘南スタイル」という。）によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

(高橋委員)

現地視察にも行かせていただき、事業の素晴らしさを肌で感じた。その上で、いくつかわからないことがあるので質問したい。

まず、越境プログラムの中の、仕事旅行との連携について詳しく教えてほしい。

(湘南スタイル)

仕事旅行は、街の店や職人の仕事を数時間から半日程度体験するプログラムをマッチングする企業。神奈川県内の仕事を体験すること、またそれによって自分自身の100年計画を見直すという内省のセッションを組み合わせることで、越境体験を身近なところでできるのではないかと考え、入口づくりの1つとして試行的に実施した。

(高橋委員)

様々な知見を持った職員がいるということは承知しているが、人件費の比率、単価ともに高いため、その考え方を確認したい。

また、業務委託費もかなりかかっているため、その意味や理由を確認したい。

人件費等の比率が高いと、自立化はかなり難しくなるのではないか。どのように自立していこうと考えているかも、併せて教えてほしい。

(湘南スタイル)

人件費については、事業にコンサルティング的な要素が含まれること等から、知識や知見のある方を雇用している。NPOの内規を踏まえた単価ではあるが、人の質を確保するという意味で、ある程度高めの単価となっている。担い手を増やすということを強く意識して事業を進めており、レギュラーメンバーや協力メンバー等、関わる人の広がりもあるため、全体的に人件費が大きくなっている。

業務委託費については、特に情報発信に関わる部分は、立ち上げ段階だからこそデザインセンスの見える、クオリティの高いものを示したいため、撮影や執筆をプロの方に依頼している。撮影や執筆に関しては、そこに関わってスキルを身につけていく人を増やしているため、今後も変わらず高額な費用がかかってくるわけではない。

総じて、人件費を抑えつつクオリティを担保するための努力が必要だと考えている。

(高橋委員)

それを踏まえ、どう自立していくのか。

(湘南スタイル)

現状で言うと、まちのキャリアラボと越境プログラムのほうで、研修ワークショップ型、体験ツアー型、カウンセリング型という形でサービス提供をしている。仕事旅行とのセッションでも参加費を徴収していこうと考えている。外部向けに発信するイベントやワークショップは現在も有償提供。このあたりで収益を上げていきたい。

(高橋委員)

主にキャリアラボと越境プログラムのコンテンツによる収益によって自立を目指していくということでしょうか。

(湘南スタイル)

そのとおりである。企業向けは単価が高くなる傾向にあるので、クオリティを高めつつ、単価も上げていければと考えている。

(高橋委員)

情報発信においてクオリティの高さを求めているようだが、プロボノという観点でやられれば今後の自立にもつながっていくと思うが、いかがか。

(湘南スタイル)

実際に関わってみると、参画されるのはハイスペックかつソーシャルマインドにあふれる方が多く、地域性や社会性のある事業にプロボノという形で関わる人を増やしていきたい。

(尹委員)

安定的持続に向けた自立化の状況について、実際に実現したことよりも、主に目標や今後の想定が書かれている。これまでどのようなことを実現し、それによってどのように運営基盤が整備されたのかを具体的に教えてほしい。

(湘南スタイル)

まちのキャリアラボについては、イベントやワークショップを販売していく。これまでで言うと計4回、25名が参加した。あと3回実施する予定。併せて、そうしたことを実施できる人を育てていきたいと考えている。

越境プログラムのほうは、企業または企業人に対して越境体験を通じた人材の育成の機会を、地域のフィールドを使いながら提供していくサービスなので、これらの販売を行う。越境に関しては、具体的に課金をして提供したのは仕事旅行とのコラボプログラムにとどまっている。今後、企業複数の混合型セッションの販売を検討していきたい。

(尹委員)

色々なところから助成を受けている。そろそろ団体自体が自立としていてもおかしくないと思うが、いつ頃を目途に自立できると考えているか。

(湘南スタイル)

団体としては助成を受けているが、個別の事業で見れば自立しているものもある。

(尹委員)

現在協働事業として実施している事業はいつ頃自立できそうか。

(湘南スタイル)

負担金を受けている3年間で販売可能なプログラムを作り、4年目の段階で、現状レベルで関わっている人の人件費を一定程度まかなえる程度の収入が得られるようにしたいと考えている。

【江の島セーリング魅力発見プロジェクト】

特定非営利活動法人湘南港マリンセンター（以下「湘南港マリンセンター」という。）によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

（長坂会長）

協働部署に伺う。この事業が継続すれば3年目、オリンピックの終了後は、どのような形で協働していくのか。

（セーリング課）

団体のほうから、企業、学校等様々な地域リソースと連携した持続可能な活動基盤を形成し、自立化を図るといった発表があったが、セーリング課でも、小さな子ども達にセーリングの楽しさを知ってもらうような取組を進めている。団体にも、我々が培ったノウハウを委譲して、色々なセーリングを知ってもらう機会を作ってほしいと思っている。

また、団体のほうでも企業との連携に向けて動いていただき、障がいのある方に対してセーリングの魅力を伝えるといった活動も実施することができた。2021年は先ほど述べた県のノウハウもつぎ込んで、企業や学校等と連携して、協働部署と一緒に持続可能な、自立化を図れるような活動を進めていきたい。

（長坂会長）

オリンピック終了後は、セーリング課は解体されるのか。

（セーリング課）

現時点ではまだどのような形になるかはわからないが、少なくともセーリングに関する活動が完全に打ち切られるわけではない。例えば、既存の課に事業と担当職員が移行するという形があり得ると思う。

（長坂会長）

障がい者に関する取組をもう少し詳しく説明してほしい。

（湘南港マリンセンター）

障がい者の方に、ヨットに乗ってセーリングを体験していただくというイベントが11月30日にある。それに先立ち、湘南にあるケアセンターに訪問し、その利用者に対して、リハビリの一環としてセーリングをやってみませんかという呼びかけをしている。

(長坂会長)

人についても物についても、かなりのリソースをオリンピックやパラリンピックに割いていると思うが、今年度の事業は計画通り実施できるという認識でよいか。

(湘南港マリンセンター)

今年度の計画は実施できると思う。

(長坂会長)

当初の申請書は、セーリング人口を増やしたい、セーリングに関心を持つ人を増やしたいという目的があり、そのために国際交流や障がいのある方への体験機会の提供、また解説者の養成等を行うといった計画であった。目的に沿ったストーリーがあり、問題意識が明確だった。

しかし、今回の提案書は、セーラーの普及・育成ということだけが書かれており、しかもそれは9月以降でなければできないとされている。夢やストーリーがあまり感じられなかった。課題解決型の事業というより、やりたいことを並べただけのように見えてしまうが、この点についてどう考えているか。

(湘南港マリンセンター)

提案書を提出した8月の時点では、オリンピックに関する状況が全く読めなかったが、今は、ある程度状況が見えてきた。オリンピックが終わるまでは、できるだけ多くの方にオリンピックを盛り上げていただき、それをきっかけにセーリングに興味を持っていただきたいというのは当初から変わっていない。それに加えて、企業の方等に、セーリングを応援したいと思っていただけるような体験の機会を提供していきたい。

(長坂会長)

団体としてそれをやりたいということはわかる。そのことと、基金 21 による支援が必要かというのは別の話である。提案された事業が、基金 21 による支援を必要としている理由がよくわからないので質問している。

(湘南港マリンセンター)

①初心者コース／②アドバンスコースと記載したが、これは、団体としての活動というより、初心者コースを広く多くの方に知っていただくという趣旨で記載している。

(長坂会長)

当初の申請では障がいのある方への言及があり、審査会もその点に注目し、その旨をお伝えした。今回の提案では障害者についての言及がなく、審査会が評価した部分との行き違いがあるように思う。

(湘南港マリンセンター)

障がいの有無にかかわらず対象としたいという趣旨であり、障がいのある方を除外する趣旨ではない。

(長坂会長)

3年度目、オリンピック終了後に実施しようと思いついている事業は、必ずやる必要があることだと認識しているのか。

(湘南港マリンセンター)

必ずやらなければならないことだと思っている。今年度の事業を進めていく中で、企業との新たな連携の形も知ることができた。当団体の活動を見てくださっている方が多いということもわかった。できればこの活動を継続していきたい。

(渡邊委員)

具体的にどのような形で資金を確保していくのか。

(湘南港マリンセンター)

当団体の主な収益源は、競技の運営支援。人や船を提供して収益を上げている。

また、藤沢市や葉山町等、行政が実施する体験イベントのほとんどを当団体が受託しており、そうしたところで事業収入を得ている。

当団体は、県内の関連団体すべてとつながり、ネットワークされたハブ団体であるため、関連団体にオーダーが入った場合であっても、最終的には当団体も支援を行い、収益が上がる。

【子ども支援活動地域サポート推進事業】

特定非営利活動法人神奈川子ども未来ファンド（以下「神奈川子ども未来ファンド」という。）によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

(田中委員)

子ども支援のサポートということで、非常に領域が広い。その中でも、いじめ、虐待、貧困というのが重点的な項目であるという認識でよいか。

(神奈川子ども未来ファンド)

そのとおりである。

(田中委員)

コーディネーターやサポーターも、そういった項目について知見を持った方を積極的に発掘するという認識でよいか。

(神奈川子ども未来ファンド)

そのとおりである。

(田中委員)

セミナーの参加者数が課題であり、参加者数が伸び悩んだ理由として、セミナーの専門性が高すぎたためと分析されている。今後どのように対応していくのか。

(神奈川子ども未来ファンド)

子どもに関する問題は多岐にわたっている。難しくても、普遍的で、かつエビデンスのある話ができる方をお願いしてセミナーを開催していきたい。また、映像を交えたり、実態と理論を交互に行き来してイメージが湧きやすいような内容になるよう企画していきたい。

(田中委員)

端的に言うと、専門性を維持しながらもわかりやすいセミナーにしていく、という趣旨で理解した。

サポーターの創出と掘り起こし事業の対象として想定しているのは、専門性のある方のみか。それとも、関心はあるもののまだ実際には活動をしていない一般の方も含めて対象として想定しているのか。

(神奈川子ども未来ファンド)

一般の方も対象として想定している。当団体が実施するイベントには、専門性の有無にかかわらず様々な方が来る。

(田中委員)

ピンクシャツデーやフェスタ、イベントの開催等によって、非常に多くの方の関心を掘り起こすことができたと思う。このことが、サポーターの登録等にどうつながっていくと考えているか。あるいは、すでに何か手応えや成果があるのであれば教えてほしい。

(神奈川子ども未来ファンド)

まず、イベント自体の協賛をいただきやすくなり、その縁もあって様々な企業の方と情報共有等が気軽にできるようになった。さらに、イベント等の参加者の中には、当団体の活動に共感して運営に協力してくださるような方も現れている。取組の輪が

徐々に広がりつつあると実感している。

(水澤委員)

実績が十分あり、役員の専門性も高い。今回の事業にも期待している。

まず、サポーターの役割があまり見えてこないので説明してほしい。

また、この事業におけるコーディネーターというのは具体的にどのようなことをやっていただくことを想定しているのか。

(神奈川子ども未来ファンド)

サポーターにも色々ある。例えば企業サポーターであれば、資金の援助、社員の方にボランティアとして来てもらう、物や場所を提供してもらう、等様々な形での支援がある。個人のサポーターであれば、ボランティアとして当団体の事業に参画していただく等が考えられる。

サポーターや、当団体が助成金を交付している団体同士のネットワークが構築できればいいと考えている。コーディネーターには、その際のつなぎ役になっていただくことを想定している。

(委員による審議)

○ 協働事業負担金への提案事業に対するプレゼンテーション審査の結果を踏まえて審議を行い、協議対象事業を選考した。

※ 結果は後日団体に通知。

■ 審議事項2 令和元年度協働事業負担金の事業変更について

(事務局から協働事業負担金の事業変更について説明(資料5))

○ 事業者から申請された事業変更について、審査会として異議はなかった。

■ 閉会

(原田所長より挨拶)

(審査会長より閉会の宣言)

○ 令和元年度第4回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会を閉会する。

(以上)